

X. 武士と大陸浪人 (3)

X-1 大陸浪人とは何者か？

【アジア主義・超国家主義】

大東亜戦争を影に陽に支えた大陸浪人。その彼らの思考を特徴づけるのが、アジア主義ないし超国家主義。日本ファシズムの源泉、右翼の源流と呼ばれた(丸山真男・竹内好)。「日本ファシズムのイデオロギイの源流は、黒竜会、玄洋社とさかのぼってゆくと、西南戦争の反革命の巨頭である西郷隆盛にゆきつく」(竹内好「日本のアジア主義」1963)。

- ⊙ 研究者はこれらをいずれも近代の問題として捉えた。
- ⊙ 今回は武士論から大陸浪人を語ってみたい。実際、政治的にも精神的にも、八百年にわたって日本史の中心を占拠してきた武士の〈精神〉が、維新にいたってそう簡単に消え去るものだろうか？

X-2 武士のゆくえ

【近世身分制社会】

・前近代の封建的前提(暗い圧政のイメージ)は正しかったか？(近年の研究動向)

- ⊙ 三谷博「明治維新には、目立った、『原因』らしい『原因』は見あたらない」(『明治維新を考える』2006)
- ⊙ 身分制(士農工商)・鎖国等々の封建的要素に対する疑念。

・近世における「家」とはなにか？

- ⊙ 分業体制を維持する職業学校。人格に家格が優先(というより、人格が家業とともに形成される)。
- ⊙ 農業・漁業(つくる・とる)、工業(取得物を加工する)、商業(加工したものを交換する)。この普遍的な人間の生産様式の上に、これをコントロールするエリート(武士)を想定する身分制(『漢書』・『淮南子』)。したがって、武士はもっぱら学者である。
- ⊙ 分業体制の外部からの需要にはどのようにして対応したのか。「人外」の存在。

・性欲のいびつな解放、恋愛の抑圧

「私ニ婚姻ヲ締ブ可カラザルノ事」(『武家諸法度』)

こころと恋に責められ、五十四歳までたはふれし女、三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人、手日記にする。「井筒によりてうなるこ」より已来、腎水をかへもして、「さても命はある物か」。

「これぞ二度都へ帰るべくもしがたし。いざ途首の酒よ」と申せば、六人の者おどろき、「ここへもどらぬとは何国へ御供申し上ぐる事ぞ」といふ。「されば、浮世の遊君・白拍子・戯女見のこせし事もなし。我をはじめてこの男ども、こころに懸る山もなければ、これより女護の嶋にわたりて、抓みどりの女を見せん」といへば、いづれも欲び、「譬へば腎虚してそこの土となるべき事、たまたま一代男に生れての、それこそ願ひの道なれ」と、恋風にまかせ、伊豆の国より日和見すまし、天和二年神無月の末に行方しれずになりけり。

井原西鶴『好色一代男』1682年

【さまざまな武士論】

① 原勝郎＝柳田國男武士論（ナショナリズム）

江戸期の学者が、古は兵農一致と論じたのは有名なことであるが、人によってはこれを平時に武士が下人を指揮して、農業を営んでいたというだけに解して、武家も農家も古くは同一の団体の一分子であったというまでには思っておらぬものがあるかも知れぬ。しかしこれはそのような、中途半端なものではなくして、徹底的に武家すなわち農家であったことは疑いなき事実で、これがまた日本の社会のすこぶる誇るべき特色で、あるいは世の中が末になったごとく憤る人もある時勢に際して、吾々が将来の発展に対して、なおすくなくからざる希望を持つ根拠である。

柳田國男「家の話」

⊙ 周縁に住む農民から生まれた健全な鎌倉武士（坂東武者）のイメージ。（在地領主制論）

② 久米邦武＝高橋昌明武士論（中央集権論）

武の本体は公家社会にあり、そこで発達した弓馬の道を吸収することによって武門武士の武芸が生まれた……。

高橋昌明『武士の成立 武士像の創出』

⊙ 武士は職能集団。中央に住む貴族（伊勢平氏や河内源氏）から武士は生まれた。（権門体制論）

③ 折口信夫武士論

山ふし・野ふしと言ふ、平安朝中期から見える語には、後世の武士の語原が窺はれるのである。『武士(ブシ)』は実は宛て字で、山・野と云ふ修飾語を省いた迄である。

折口信夫「国文学の発生（第四稿）」

此頃〔平安末期〕になって目立って来た、もう一つの浮浪者があつた。諸方の豪族の家々の子弟のうち、総領の土地を貰ふことの出来なかつたもの、乃至は、戦争に負けて土地を奪はれたものなどが、諸国に新しい土地を求めようと、彷徨した。此が又、前の浮浪団体に混同した。道中の便宜を得る為に、彼等の群に投じたといふやうなことがあつたのだ。後世の「武士」は、実は宛て字である。「ふし」の語原はこれらの野ふし・山ふしにあるらしい。又、前の浮浪者としても、元来が、喰はんが為の毛坊主商売なのであつて見れば、利を見て、商売替へをするには、何の躊躇もなかつた。

折口信夫「ごろつきの話」

- ⊙ 武士は「ゴロツキ」から生まれた、「巡遊団体」の一種。うかれ人・ほかひ人。
- ⊙ たんなる罪障論ではない。流人にして神聖な（＝いかがわしい）存在。経済論が背景にある。
- ⊙ 彼らが、ひとの忌み嫌う仕事＝殺生＝戦争に対応（否応無しに仏教道德を超える存在とならざるをえない）。

X-3 アジア主義の誕生（頭山満）

【日本全国戸籍表（明治六年）】

華土族・卒の人口は 192 万 7848 人、全人口 3008 万 9401 の 6.4 パーセントを占めていたとされる。このうち華族は 2251 名であり、華族に属することのできなかつた 200 万の武士たちがいる。

⊙ 彼らはどこに消えたのだろうか？

実業家（志賀直温や岸田吟香）や農政家（新渡戸稲造）に。しかしそれがすべてではない。

→ 自由民権運動へ。

【玄洋社社史（前文）】

すめらみ国の武士は いかなる事をか勉むべき
惟身に持てる真心を 君と親とに尽すまで
（加藤徳成作筑前今様）

酒は呑め呑め呑むならば 日の本一のこの槍を
呑み取る程に呑むならば これぞ誠の黒田武士
（黒田藩武士歌今様）

頭山満君、大人長者の風あり、かつ今の世、古の武士道を存して全き者は、独り君有るのみ、君言わずして然して知れり、けだち機智を朴実に寓する者というべし。

中江兆民『一年有半』

- ◎ 自由民権運動の参加者は総じて征韓論者だが、それを唱えた西郷隆盛が「最後のサムライ」（内村鑑三『代表的日本人』）と呼ばれていたことに注意しよう。
- ◎ 「野に伏し山に伏す位は常住の事……」（頭山満）
土地もなく、売るものとおのれの身体以外にはもたぬ元武士がなお、《武士道》にその根拠を見いだしたとしても、それはけっしておかしなことではない。
→ ただし、それは折口信夫のいう傾き者たちの「ごろつき道徳」。〈暴力によって語る〉道徳。
- ◎ 彼らは、かつての山伏や野伏のように、為政者の定める法の外部にあって、自由自在の存在。野伏や山伏が逃走の場を山や野に定めたように、彼らはその舞台を大陸に定めるだろう。われわれがやや粗雑に「アジア主義」と呼んでいる思想の担い手は、まちがいでなく、上記のような元武士たち（一八八〇年設立の最初のアジア主義団体である興亜会の担い手は、非藩閥出身の旧士族ないし自由民権論者）。

民権の伸張大に可し、然れども徒に、民権を説いて、国権の消長を顧みる無くんば、以て国辱を如何せん、宜しく日東帝国の元気を維持せんと欲せば、軍国主義に依らざる可らずとし、国権大に張らざる可らずとし、遂に曩の民権論を捨つる弊履の如くなりしなり。

『玄洋社社史』

- ◎ 民権主義者にして国権主義者であり、いわば国民国家主義者。アジア中に国民国家を作るべく、彼らは戦う。日本はその尖兵、という位置付け。

X-4 大陸浪人と民本主義者

私の敬服に堪えないのは、彼の態度のあらゆる方面に亘って純真を極むることである。彼は幾多の失敗をくり返し、また幾多の道徳的罪悪をさえ犯している。それにもかかわらず、われわれはこれに無限の同情を寄せ、時にかえって多大の感激を覚えさせられ、また数々の教訓をさえ与えられる。なかんずく、支那の革命に対する終始一貫の純情の同情に至っては、その心境の公明正大なる、その犠牲的精神の熱烈なる、共に吾人をしてついに崇敬の情に堪えざらしむる。私はここに隠すところなく告白する。私は本書によってただに支那革命初期の史実を識ったばかりでなく、また実に支那革命の真精神を味うを得たことを。

吉野作造「宮崎滔天『三十三年の夢』解題」

◎ 宮崎滔天は初期の大陸浪人のひとり。

→ 吉野の熱烈な大陸浪人に対する賛辞。

・大正デモクラシーとはなにか？

従来學校ノ設アリテヨリ年ヲ歴ルコト久シト雖トモ或ハ其道ヲ得サルヨリシテ人其方向ヲ誤リ學問ハ士人以上ノ事トシ農工商及ヒ婦女子ニ至ツテハ之ヲ度外ニヲキ學問ノ何物タルヲ辨セス（…）今般文部省ニ於テ學制ヲ定メ追々教則ヲモ改正シ布告ニ及フヘキニツキ自今以後一般ノ人民〈華士族卒農工商及婦女子〉必ス邑ニ不學ノ戸ナク家ニ不學ノ人ナカラシメン事ヲ期ス

「學事獎勵ニ關スル被仰出書」明治5年

◎ 家から職業学校としての機能を奪う改革。人格主義。大学出という階層、サラリーマンの出現。それが大正デモクラシー。吉野はこの学制における筆頭。

◎ 裏を返せば、誰もが武士になるということ＝自由民権＝民本主義。

万民をすべて一視同仁、陛下の赤子(せきし)とすること、百姓もみな武士と同様にすること

板垣退助

武士なる特種の階級と特権とが国民全般に頒たれた今日、武士は日本国全体の精神でなければならぬ。ひとり軍人のみならず、官吏も会社員も商人も農民も漁夫もすべてが武士道の精神によって行動しなければならぬ。

頭山満

武士道はその最初発生したる社会階級より多様の道のりを通りて流下し、大衆の間に酵母として作用し、全人民に対する道徳的標準を供給した。武士道は最初「選良」の光榮として始まったが、時を経るに従ひ国民全般の渴仰及び靈感となつた。

新渡戸稲造『武士道』

◎ 民衆はみな、武士に（国民皆兵の日本的理解）。それが日本の近代化。

X-5 現実のアジアとその《指導》

阿Qは、以前から革命党という言葉を目にしていて、今年はまだ革命党を殺すところも自分の眼で見た。しかし彼はどこから得たものか、革命党とは謀反だ、謀反は自分には具合の悪いものだ、という意見を持っていて、そのため、これまでずっと「徹底的に憎」んできていた。ところが思いきや、それが百里に名の聞こえた挙人旦那をこれほどこわがせるとなると、彼としてもいささか「あこがれ」ざるを得ない。……「革命も悪くないぞ……欲しいものはおれのもの、好きなやつもおれのもの……」

魯迅『阿Q正伝』

かりに鉄の部屋があって、まったく窓がなく、こわすこともとてもできないとする。中には、たくさんの人たちが熟睡している。間もなく窒息してしまうだろうが、昏睡のまま死んで行くのだから、死の悲哀を感じることはない。いま、君が大声をあげて、多少意識のある数人を叩き起こせば、この不幸な少数者に救われようのない臨終の苦しみをなめさせるわけだ、それでも彼らにすまないと思わないか？

魯迅『呐喊』

人には当然、三種類がある。第一種の人を、先知先覚という。…先知先覚者は、世界の創造者であり、人類の創造者

である。第二種の人は、後知後覚という。この種の人の聡明さと才能は、第一種の人にくらべて一段下である。自分では創造も発明もできず、ただ追従し模倣するだけである。…第三種の人は、不知不覚という。この種の人の聡明さと才能は、さらに一段下である。なにごとであれ、人から教えられても、知ることができず、ただ行うだけである。

孫文「三民主義」

- ◎ 同じ中国人の内部にある決定的な亀裂の認識。
- ◎ 《国民》形成を目指す大陸浪人（頭山満や北一輝）と孫文との対立へ。

【戦争の本質は「指導」】

戦争は人間一切の自然的要求、自然的情欲を超越克服して、或る〈より高き〉ものに仕ふるの心、即ち道義的精神をその根底とするものである。かくて戦争を〈為る〉事は、戦争を為(す)る人に取つては、既にそれ自身道徳でなければならぬ—我等は心に銘して深く大いなる此の事実を忘れてはならぬ—かくて戦争を以て〈直ちに〉非文明の事、野蛮行為と為す人は、自らその言ふ所を知らざる人か、然らずんば、人間的幸福を以て無上のものとして、物質的文明に随喜の涙を流す唯物主義者、幸福主義者、豚、支那人の弟子でなければならぬ。

鹿子木員信『永遠之戦』1937

- ◎ 武士道を「最も貴く美はしきもの」であり「武士的精神なき日本人を考ふる事は出来ぬ」と絶賛。それを理解せぬシナ人に鉄槌を下す……。

日本は今こそ世界史に主体的に、主導的に働いてゐる。世界秩序の変革を己に擔つて、世界史の最尖端において働いてゐる。それは一応「十二月八日」に急速に始まつたと云へるが、その由来根源といふものは遙かに古い。(…)大東亜戦争で示された日本の主導性、主体性は、実は支那事変の起るずっと前から隠然としてあつたのだ。日露戦争で既にこれが明瞭に示されてゐる。日本の勝利はインドやイスラム圏などのアジア民族に大きな刺戟を与へてゐる。日本は何といふか、アジアを代表するやうな、アジア民族の指導者といふやうな主体性を発揮したわけだ。ヨーロッパの帝国主義の攻勢を挫いた唯一の国民なんだから——。

高坂正顕、西谷啓治、高山岩男、鈴木成高「座談会 総力戦の哲学」1943

八紘を一字と為す戦争それ自身が、民族の自覚と共存共栄とを生み出す《指導》である。戦争が平和を作り出す、というよりも、戦争それ自体がひとつの平和なのだ……。明治維新を経て憲政を実現した〈元〉武士たちが、大東亜戦争にいたって確立した狂気思想、それがアジア主義である。アジアをさまよう日本兵とは、縊り残されて国外に逃れた元武士たちの亡霊であり、大東亜戦争とは、彼ら亡霊との再会でもあった。

一八八九年の憲法発布後、法治国家となり立憲主義国となって以降の日本の国内政治は、もはやひとびとの憲法解釈の束にすぎないものとなった。穂積八束や上杉慎吉が、美濃部達吉や吉野作造が憲法をどのように理解していたか、そのことを追いかけていけば、国内政治史は覆うことできる。その意味では、東京帝国大学法学部の法制史といってさえ過言ないものだ。彼らの語る西欧的な装いを得た近代法の解釈史に準拠して、そこからの逸脱を一方に想定すればすむ。国体明徴運動のような逸脱を糾弾し、政治が法の内部に取まっていることで胸を撫で下ろす。しかしそれは歴史というには小さなものである。ほんとうの歴史は、憲政の外部にあった。けっして列島の内部に取まらない、広大な大陸のそこかしこで法外な世界を占拠したアジア主義者たちは、まさにそうした意味で、大東亜戦争を引き起こした真に歴史的存在であった。むろん本稿の考察は、大陸浪人の巨大な歩みのうち、ほんのわずかな部分に触れたにすぎない。ただ彼らを一貫して物語るための言葉をなんとかして提供しようとしたのであり、その準備をただけである。しかし、それ以上に気になってい

ることがある。重要性において彼らに匹敵する、別種の存在を語り残している。

《文士》である。大陸浪人になるばかりが、元武士たちの道行きではなかった。幕末に数奇な運命をたどった小田原藩士の息子、北村透谷は、朝鮮に渡るべく大阪事件を起こした民権派の闘士大井憲太郎らに離反し、まもなく、《文学》に新たな戦いの場を求めることになる。透谷に端を発して彗星のように登場する数多の文士たちもまた、法外の存在であり、彼らは国家の内部にいながらにして、大陸とは異なる統治の外部、すなわち《精神》を、見つけたしたのである。

B おそらく一八八九年以後、近代日本の歴史は、彼らを二つの極として、展開されることになるのである。

田中希生「アジア主義について 武士と大陸浪人」『人文学の正午』8号（初稿）